

ahaki

あはき あん摩・はり・灸のおしごと

vol.04

函館視力障害センター60周年記念特別号
寺崎 直の国際支援活動

Autumn, 2024



地球とつながる「あはき師」 国際支援の道を拓く 寺崎直のストーリー

「ahaki」第4号は、vol.02で特集したPR動画にも出演した視覚特別支援学校教諭 寺崎氏のもとを訪れ取材しました。

寺崎氏は、2013～2016年にかけて実施されたJICAの草の根支援事業のプロジェクトマネージャであり、日本のあん摩マッサージ指圧をインドの視覚障害者に伝えた立役者です。

インドは文化の源流 教員が担った挑戦

「カレーですか?もちろん好きですよ(笑)。」

「インドに興味を持ったきっかけは、仏教やヨガ、格闘技など様々な文化の源流はインドにあると思ったこと。」

東京外国語大学・地域国際課程でヒンディー語やインド文化を学び、インド共和国立アラーハバード大学へ1年間留学。その際に度々目撃した、ストリートで物乞いをする障害者の姿がインドプロジェクトの原点となった。

構想10年、準備5年を経て実現した3年間のJICAプロジェクトでは、あん摩マッサージ指圧を指導する2年課程コースを設立した。

通常、国際協力機構(JICA)のプロジェクトマネージャは専任で務めるものだが、驚くべきことに教員としての職務を果たしながら、構想から19年の歳月にわたりプロジェクトを遂行した。

新型コロナウイルスのパンデミックにより、この活動は一時的に中断されていたが、2023年12月、その活動は再び始動した。

困難を乗り越えて理解を勝ち取る

「寝る暇のない3年間だった」と、プロジェクト実施期間中を振り返る彼の言葉には、困難に立ち向かってきた情熱がにじんでいる。

「プロジェクトマネージャと担任業務の両立が困難なことは最初から分かっていました。学校側からは、通常業務をこなしてプラスアルファとして国際支援活動を行うべきだと言われました。本当はカッコいいことが言えるとよいのですが、身体がもたなくて(笑)。実は、途中で担任を交替することになってしまいました。」

インドはその文化的背景から、国際支援を行うことが難しい国であると言われている。寺崎氏にとって、インドプロジェクトを実行する中で一番難しかったことはなんだろうか。なぜそのような大変なことを成し遂げようとしたのだろうか。

「インド文化は大学生の頃から学んでいたし、留学前にもカラリパヤットという格闘技の源流を学びに行きました。留学



中はヨガ修行をしたり、インド人の友人もいたので、インドが特に難しい国だとは思っていませんでした。一番大変だったことはインドよりも、日本の教育関係者に国際貢献活動の意義を分かってもらうことでした。」

両親や仲間たちの支えがあったことも明かしている。

「両親がキリスト教徒で、私のナオシという名前は、なおく歩む人生でありますようにと、聖書からつけたと聞いています。両親は私がインドプロジェクトをしていることを誇らしく思ってくれました。「大変だから」は、やらない理由にはなりません。簡単ではないからこそ、この活動に意義があると思うし、心から応援し、助けてくれる仲間もいました。インドプロジェクトの成功は、多くの方々に協力していただいた成果です。」

寺崎氏の持つ人生変革の力

我々は寺崎氏から自身の弱視を理由に「できない」という言葉を聞いたことがない。

その寺崎氏に出会って、人生が変わったと語る生徒の声を聞くことができた。

「寺崎先生の言葉には力があり、生徒の人生をより良い方向へと導く力を持つ先生です。先生がいてくれたから、私は教員を目指しました。先生はいつも励ましてくれて、本当に助けてくれました。」

彼の国際支援活動に反対した者の意見も納得できる。彼自身の持つ力を最大限に発揮し、日本の視覚障害教育に注力してほしいと誰もが期待せざるを得ないからだ。

アシッドバイオレンス(被害者が硫酸で襲われる暴力)は途上国で発生している深刻な社会問題である。あるインド人活動家は、政敵による襲撃を受け、顔と身体が溶解し全盲となった。彼は数年間、孤独と絶望の中で引きこもっていたが、寺崎氏らによって伝えられた日本のあはきとの出会いを通じて新たな希望を見つけ、今やあはきの治療院を開業し、未来に向かって勇敢に歩んでいる。

未来への展望

「日本鍼灸の普及と教員養成施設の設立」

寺崎氏の将来の展望には、日本の鍼灸をインドに伝える取り組みや、現地の教員養成施設の設立が含まれている。

「(すでにあはきコースを設定した) モデル校の技術チェックやワークショップを実施しながら、日本の鍼をインドに伝えたいと考えています。」と語り、国際的な視野での活動を続ける意志を示してくれた。

「当たり前は当たり前ではない」

最後に「活動にそこまで乗り気でない教員も一度現地を訪れたら、全員即座に国際支援の必要性を理解し、協力してくれました。途上国では障害者の人権が著しく制限されている。こ



れは現地へ行ってみないと分からない。日本の障害者福祉は途上国と比べものにならないほど充実している。それを当たり前だと思うのでなく、当たり前に見えることが決して当たり前でないということを知って欲しい。」と、寺崎氏は語った。

「世界の視覚障害者に光をもたらす挑戦」
「途上国の障害者の現状は日本とは比較にならない」という寺崎氏の言葉を振り返ってみたい。

世界保健機関（WHO）によると、世界の人口の約 15% が障害者であり、障害者の約 80% は途上国で暮らしている。障害者の多くは、就労の機会が制限されており、さらなる貧困状況に陥りやすいという悪循環に直面している。彼の国際支援活動は、日本の視覚障害者のみならず、多くの途上国の視覚障害者に光をもたらすものである。

日本の「あはき」のプレゼンスと視覚障害者の尊厳

安倍元首相がインドを訪れた際、昭恵夫人が寺崎氏らの設立したコースを訪れ、施術を受けたというエピソードがインドの新聞数紙で報道され、注目を浴びた。日本のあはきは視覚障害者のエンパワメントを促す先進的な取り組み



みとして国際的には高く評価される。今後日本にその評価が逆輸入され国内のプレゼンスと評価が高まることを願う。

編集後記

困難に立ち向かうためには、情熱が不可欠であることを再認識した印象的なインタビューであった。

あはきは、単なる疾病の予防や治療手段にとどまらず、視覚障害者にとって尊厳を保つ重要な職業であることが、寺崎氏の言葉から鮮やかに浮かび上がった。

あはき師紹介

寺崎 直(てらさき なおし)

東京都板橋区出身。剣道五段、週末には熱心に子供たちに剣道を指導。高校・中学の英語教諭かつあはきの教員免許を保有。東京外国語大学で学んでいたとき、黄斑変性と診断を受ける。卒業後は放送局で数年間、ヒンディー語番組制作に従事。その後、以前から興味のあったあはきを学び、筑波大学教員養成施設であはきの教員免許を取得。現在、筑波大学附属視覚特別支援学校を拠点に、視覚障害者の職域が確保されていない途上国におけるあはき教育の拡充と定着に努めている。



ahaki 創刊にあたって

北海道の函館市に視覚障害者の方を対象とした「あん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師」の養成施設があります。ここで学ぶ仕事のことを、頭文字をとって「あはき師」と呼んでいます。ahaki は、「あはき」の仕事の魅力、伝承医術としての「あはき」の奥深さについて、それらを未来へとつなげていく人を通して伝えていきたいと思います。

第4号は、国際支援で活躍する寺崎氏の活動を通して「あはき師」の魅力をお送りしました。次回もご期待ください。

ahaki

発行者
国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局函館視力障害センター
自立支援推進委員会 地域連携分科会
公立はこだて未来大学 暮らしのデザインラボ

vol.04
2024 年 9 月 1 日 発行

プロモーションビデオ視聴【QRコード】

